

座談会

## もんじゅ再開と今後の課題 —いかに国民理解を得るか



〈出席者〉

秋庭 悦子 氏

原子力委員

首藤 由紀 氏

(株)社会安全研究所 代表取締役所長

伊藤 和元 氏

日本原子力研究開発機構 理事

(五十音順)

司会：本誌編集長 中村 悦二

### 事故後の14年を振り返って

**司会** 高速増殖原型炉もんじゅの運転再開までに14年以上を要しました。それに関して、お聞きしたいと思います。まず、伊藤理事から実施機関としてご見解をお願いします。

**伊藤** 「もんじゅ」のナトリウム漏えい事故(1995年12月8日)後のあゆみにつきましては、表1にまとめてあります。

もんじゅ事故は、次の3つの面から国民や地元の方々の信頼を大きく損なったと考えています。第1は「もんじゅ」の安全性の面、第2は「もんじゅ」(高速増殖炉)の開発の必要性、第3は組織や職員に対する信

頼の面です。

第1の安全の面では、事故の原因究明及び安全性総点検の実施、それに基づくナトリウム漏えい対策等改良工事(国の許認可、工事の実施・工事後の確認)、更に長期間停止中の設備を含めたプラント全体の確認を行い、これらを終えるまでに約10年を要しました。

第2の高速増殖炉の必要性や将来性について、欧米の高速炉開発が中断されるという情勢が続いていた中で「もんじゅ」事故が起き、1998年にはフランスの高速増殖実証炉スーパーフェニックスの廃止が政治的・経済性の観点から決まりました。このため、ナトリウム冷却高速増殖炉は将来、本当に必要となるのかについて議論を起こすこととなりました。原子力委員会では1996年「原子力政策円卓会議」を設置する等、「もんじ

ゆ」に関する国民参加の徹底的な議論が行われ、2000年に原子力長期計画がまとめられました。そのときは、高速増殖炉は将来の電源の有力な選択肢の一つということで、かなり地位が落ちてしまいました。

2005年に策定された原子力政策大綱では、「ぶれない政策」ということで、核燃料のリサイクル政策をしっかりつくっていただき、高速増殖炉の将来と「もんじゅ」の必要性を明確にさせていただき、国の政策としての信頼を回復していただきました。やはりこのために約10年かかったと考えています。

第3の組織や職員に対する信頼の問題は、信頼に足る組織に改善されたのか、職員の意識改革は出来たのか、そして地元の一員として共生できるのか、という問題です。これらへの対応もやはり10年、あるいはもっとかかりました。組織のリスク管理や職員意識の改善努力は、2度の組織改革(動燃→サイクル機構→原子力機構)の中でも確実に継続されてきました。2008年のナトリウム漏えい検出器誤警報の際に連絡通報が遅れるということが起きたので、さらに一層の改善、強化を必要としました。次に、「もんじゅ」や職員は地元本当に溶け込んでやっているのかという問題、原子力開発だけやっていて、ほかの産業に対して、本当に共生しているのかという問題ですね。特にこの

点では、福井県が策定されたエネルギー研究開発拠点化計画へ積極的に参画しました。また、地元の方々の理解促進活動ということで、後ほど説明しますが、双方向コミュニケーション等に大きな努力を続けて、それが実ってくるのにやはり十数年かかりました。

信頼を大きく損なったが故に、回復に十数

年という長い時間がかかりました。その信頼をこれからも、地元の皆さん、国民にご理解していただき、これからいよいよ「もんじゅ」を運転再開し、本来の高速増殖炉開発を進めていきたいと思っています。

司会 秋庭さんは、原子力委員になられる前は、草の根でいろいろなところをお回りになっていましたが、「もんじゅ」は話題の1つだったと思います。そのご経験から、この14年をどうお考えでしょうか。

秋庭 14年間は本当に長かったなと思っています。



伊藤 和元氏

表1 もんじゅ事故後のあゆみ(出典：日本原子力研究開発機構資料)

1983年 5月	原子炉設置許可	2004年 1月	改造工事に係る設計及び工事の方法の認可
1985年 10月	建設工事開始	5月	もんじゅ関連協議会
1991年 5月	機器据付完了、試運転開始	8月	美浜発電所3号機で配管破損事故
1994年 4月	初臨界	12月	もんじゅ行政訴訟において最高裁が国側の上告受理申立を受理
1995年 8月	初送電	2005年 2月	地元自治体から改造工事事前了解を受領
10月	40%出力到達	3月	改造工事の準備工事を開始
12月	ナトリウム漏えい事故	5月	もんじゅ行政訴訟において最高裁が高裁判決を破棄・自判し、国側勝訴の逆転判決
1996年 3月	原子力委が「原子力政策円卓会議」を設置	9月	改造工事を本格着手
1997年 3月	旧動燃の東海再処理施設で火災爆発事故	2006年 12月	工事確認試験開始
1998年 3月	旧科技厅が「もんじゅ安全性総点検」の結果を公表	2007年 8月	改造工事の工事確認試験を完了
10月	核燃料サイクル開発機構が発足	8月	プラント確認試験を開始
1999年 9月	東海村のJCOで臨界事故	2008年 2月	初装荷燃料に係る原子炉設置変更許可
2000年 11月	原子力委が原子力長期計画を決定	2009年 6月	燃料交換
12月	地元自治体に工事計画の事前了解願ひ	8月	プラント確認試験を完了
2001年 1月	中央省庁再編	8月	性能試験前準備・点検を開始
6月	地元自治体から工事計画の原子炉設置変更許可申請についての了承を受領	11月	「もんじゅ安全性総点検に係る対処及び報告について(第5回報告)」を提出
6月	改造工事に係る原子炉設置変更許可を申請	2010年 1月	性能試験前準備・点検を終了
7月	福井県が「もんじゅ安全性調査検討専門委員会」を設置	2月	耐震安全性評価結果報告書(改訂版)を提出
2002年 12月	改造工事に係る原子炉設置変更許可	2月	原子力安全委が安全性総点検報告を妥当と了承
12月	改造工事に係る設計及び工事の方法の認可を申請	2月	性能試験再開の協議願ひを地元自治体に提出
2003年 1月	もんじゅ行政訴訟において名古屋高裁で原子炉設置許可無効の判決	3月	原子力安全委が耐震安全性評価報告を妥当と認定
12月	福井県の「もんじゅ安全性調査検討専門委員会」がとりまとめた報告書についての県民説明会		

事故が起きる少し前に、「もんじゅ」の初臨界ということで記念切手が売り出され、私は日本の将来を象徴する出来事として大変期待してその切手を買いました。ところが、ナトリウム漏えい事故で、イメージが本当に暗転してしまいました。ナトリウム漏えいそのものよりも、ビデオ隠しや、情報公開のあり方に透明性がなかったために、事故後の対応に対して国民が不信感を持ったというのが、この事故時の最も大きな問題だったのではないかなと思っています。

ただ、高速増殖炉そのものが、日本のエネルギー政策にとって重要であるということは確かです。先ほど出ました「原子力政策大綱」でもそれを明記しています。長期的なエネルギー安定供給や(原子力を除く)エネルギー自給率が4%という日本の状況を考えますと高速増殖炉サイクルのような準国産エネルギーの確保は必要だと思います。また、原子力発電というと、よく、放射性廃棄物処分が問題だと言っていますが、高速増殖炉は将来的にもこの廃棄物の処分にかかる負荷を低減してくれる可能性もあります。これらの役割は大変重要だと思っています。

ところが、先ほど伊藤理事がおっしゃったように、「もんじゅ」は信頼性の問題が大きなネックになっていたと思います。やはり透明性の確保、情報公開を大切に、これからもしっかりと進めていただきたいと思います。

実は、原子力委員になる前、昨年11月に、全国の女性たちのグループをネットワークしています、あすかエネルギーフォーラムというNPOのグループで「もんじゅ」を見学させていただきました。参加者の中には「もんじゅ」に対して、さきほど申しました“情報隠し”というよくないイメージを持っている方もいました。しかし、現場の技術者の方が性能試験前の準備・点検等を着々と進められているのはもちろん、国や県、地元の皆さんに対しても、信頼回復のために、一所懸命に動いていらっしゃるということがわかりました。参加者一同、「頑張ってもらいたい」と心から応援したいと思いました。

本当に14年という年月は長かったと思います。しかし、伊藤理事の言われた、安全性を確保する観点、それから信頼回復の観点、そして、職員の方と地元との関係、その3つの点に関する着実な取り組みを行ってきたという意味で、14年間は無駄ではなかったと

思っています。

**司会** ビデオ隠し問題では1人がお亡くなりになっている、自殺されていると思うんですが、事故が起きてからの対応では、組織内の安全文化の醸成も問われていると思いますが、この点について首藤さん、いかがでしょうか。

**首藤** チェルノブイリ事故で国際的にも安全

文化ということが注目されていましたが、「もんじゅ」事故当時、まだ国内ではそれほど安全文化を重視する風潮は強くなかったので、安全文化がないとまでは言われなかったかと思います。

私は、事故で初めて「もんじゅ」というものがあるのを知ったような状態でした。それまでも原子力には関わっていたのですが、「もんじゅ」のことはほとんど存じ上げない中で、主に報道を通じての事故の情報を得ていました。当時、私の周りの安全とか防災をやってらっしゃる方々が数多くおっしゃっていたことがあります。それは、他分野の方から見ると、(事故の原因となった)温度計のさや管で、どうしてあんな常識的にまずい設計をしちゃったんだろうということでした。これは最近、相当改善されていると思いますけれども、当時、原子力の文化は、他分野に交わらない文化、それは、恐らく「もんじゅ」だけではなくて、言葉は悪いですが、「原子力村」と言われるようなものが確かに存在していて、ほかの分野とあまり交わりにくかったのかなというふうに私は想像しています。

先ほどのビデオ隠しの件も、ほぼ同じような根っこを持つのだと思うんです。私は当時も今も、わざと悪い意図を持って隠そうとしたのではないんだと思うと思っています。よかれと思って、見やすいようにというような意図で編集されたのだと思うんですが、それを見る側がどう受け取るのかということをおまわりにも知らなすぎた。それに相手方との交流が非常に少なかった。その意味で、自分たちの中では一生懸



秋庭 悦子氏



命やっているけれども、ほかとの交流というところ  
に、実は結構厚い壁があって、それをあまり気づか  
ないでやってらしたのかなという感じがします。

その後、1999年のJCO事故の後に安全文化とい  
う話が随分出るようになりました。私は、組織の中  
のコミュニケーションも重要ですが、外部とのコ  
ミュニケーションとか、地元の方とのコミュニ  
ケーションとかが安全文化の1つの大きなポ  
イントだと考えています。厳しい言い方になり  
ますが、その部分が当時はまだまだだったの  
ではないかなと、思っています。

**司会** お二人の話を聞いて、伊藤理事、いかが  
でしょう。

**伊藤** 「もんじゅ」事故当時、外部との壁とい  
うか、中に閉じこもっているというのは確  
かにあったと思います。そういう体制や意  
識を持っていたところへ、非常にた  
くさんのマスコミの方が来られたり、い  
ろいろなVIPが来られて、逆に動転して  
しまったというところが実際の現場ではあ  
ったようです。

**秋庭** まだあの頃は、マスコミ対応に慣  
れていなかったんですね。今はもう、皆  
さん、いろいろ訓練されているよう  
ですけれど。

**伊藤** 今ではそういう部署を用意して  
いますけれども、当時は、特にそ  
ういうトレーニングをしている人  
もいませんでしたから、現場の指  
揮を執らなければならぬ課長まで  
が実際にプレス対応までやってし  
まうようになってしまいました。結  
局、大混乱を起こして、ビデオ隠  
しになってしまった。そういう意  
味では、確かに、当時の体制とい  
うのが、外に対して壁というふう  
に言われましたけれども、非常  
に貧弱な体制だったと思います。  
それと、当時はすべてを決める  
のが本社だということで、情報  
も本社に上げて、了解を得てか  
ら対応しないといけない体制で  
した。本社体制で対応する組織  
としていたのはまずかったと痛  
切に思っています。そのため本  
社主導から事業所主導に変更  
しました。

#### 教訓をリスク管理、安全文化醸成に生かす

**司会** 首藤さんがご専門の安全文化などの面では、  
非常に多くの教訓が残されているということ  
でしょうか。Lessons Learnedで行かないと…。

**首藤** そうだと思います。この14年間で、「安全文化」

と言うかどうかは別に  
して、組織全体として  
安全マネジメントをき  
ちんとやらなければい  
けないというのは、原  
子力の分野だけではなく、  
運輸安全マネジメント  
のように、航空とか鉄  
道の分野でも言われ  
るようになってきて  
います。その意味で  
は、先駆的な大きな  
教訓を「もんじゅ」が  
出した、ということ  
なのかなとも思  
います。

**司会** 事故後の安全文化醸成はどのようにな  
さったのでしょうか。

**伊藤** 事故直後の本社や現場の考え方は、  
ナトリウム漏れは2次系であり、大して漏  
れていない、安全上大きなことではな  
い、そういう感覚でした。その考えと世  
の中での受け止め方のギャップは大  
きく、その大きさに本当に慌てた。  
これが事故当時の感覚だったと思  
います。常陽や「ふげん」で表立  
った事故がなかったものですから、  
リスク管理に関する訓練ができてい  
なかった。従って先ほど言いました  
ように、本社制から、事業所・現  
場に任せていく体制に変わりました。  
しかも、現場のほうも、例えば、  
連絡責任者を置いて、外に対して  
とにかく早く連絡しようという文  
化になりました。ビデオの問題は、  
本当に残念な思いをしております。  
あれからは職員の意識が全く変わ  
りました。

小さな事故だから世の中に知らせ  
なくてもいいんだ、これで安全なん  
だと、自分たちの中で考えてしま  
っていたことを改め、小さなこと  
でも外部に伝える、という意識  
転換の必要なのが事故を通じてわ  
かった。これが正に「もんじゅ」  
事故の教訓だと思います。

それと、そういうトラブルに対する  
訓練を頭の中だけでなく、毎週  
実際に行うような文化はありません  
でした。事故後は、連絡責任者を  
決めて、毎日通報訓練をやると  
か、実際に即した訓練を14年間  
続けて行ってきました。また、週  
報という制度をつくって、それ  
に、毎週起こった小さなことも  
全部皆さんにお知らせするよう  
にしています。小さなものでも  
常に公表する



首藤 由紀氏

というプレスとのルールができ上がったことは非常によかったと思っています。こうした制度やルールを通じ、小さなものは週報ということで、余裕を持った対応ができるようになりました。我々からもいろいろと情報発信できますし、マスコミの方との対応も円滑になってきたと思います。リスク管理、透明性の面ではだいぶ良くなっているのではないかとと思っています。

**司会** ただ、現場中心では、発表は地元中心になり、全国的な理解面では齟齬を来しませんか。

**伊藤** そうした面はあります。それで、週報には、「もんじゅ」だけではなく、東海や大洗、本社の話も載せています。ただ、記載の調整は大変です。地域により温度差がありますから。

**司会** 首藤さん、理事のお話を伺って、安全文化の専門家としてのご感想は。

**首藤** それは、ある意味、当たり前ですよ。むしろ、一定の画一的な基準でいろいろ動かれるより、相手の反応に応じてといいますか、相手がどれだけどういったことに関心を寄せられているかをきちんととらえて対応されているということだと思います。

**伊藤** 実は2008年のナトリウム漏えい検出器誤警報の際に通報遅れのトラブルがあったのですが、我々はそれまで、A、B1は昼・夜を問わず直ぐ連絡、B2は勤務時間中は知らせるが、夜・休日は翌日連絡、とレベルを決めたマニュアルを持っていました。ただ、それは、相手と了解したものではなかった。本当に決めてしまうと、それにとらわれて、世の中の動きについていけないのではないかという思いもあって、本当に決めるのがいいだろうかと、いろいろ議論していた最中のことでした。

**秋庭** 重要度の基準を決めるということですね。

**伊藤** はい。それで例えば、ナトリウム漏えい検出器が誤警報を発したときにどのタイミングで発表するか議論の最中でした。マニュアルがまだ十分にできていなかったのはよくありませんでした。

**秋庭** ナトリウム漏えい事故後、リスク管理の取り組みを毎日のように訓練なさって、本当に大変だったと思います。ところが、2008年3月に、ナトリウム漏えい検出器の警報が出たときに通報遅れがあり、驚きました。

確かに、2008年3月のときは、検出器の誤報でしたので、深刻なトラブルではなかったのですが

も、根っこの部分はやはり同じように見えました。それで、とても残念に思いました。

厳しい言い方をしますが、職員の方も、事故後、最初は緊張していたと思いますけれども、10年以上も経って、だんだん取り組み方に対する緊張感が薄れてきた、そんなこともあったのではないのでしょうか。

**伊藤** あったのかもしれませんが。通報するまでに3時間ぐらい経っていましたから。2次系ナトリウム漏えい検出器の誤警報についてどこまで公表するのかという議論の最中ということもあり、またそこが1次系だったということも影響しました。本当は2次系よりも1次系の方が重要なので逆に考えるべきだったのですが、現場に迷いがあった。当時も、迷ったら連絡するというのが、みんなの合い言葉だったのですけれども、残念ながら、それが守られなかった。我々の意識の徹底が足らなかったのだと思います。その後、改めて連絡三原則をつくった。迷ったら必ず連絡、時間がかかるようだったら直ぐ連絡、兆候が見えた時点でまず連絡、この三原則を、毎月曜日に唱和しています。今言われたような、緩みが出ないようにすることも教訓です。

**首藤** ヒューマンファクターの専門家として申し上げますと、人間はもともとそんなに高い緊張をずっと続けられる動物ではないのです。緊張感をずっと保ち続けられないときちんとできないような仕組みにしていけないと思います。ですから、漏えい検出器の誤作動の問題がうまくいかなかったのは残念ですが、私は、逆に、そのときには間に合わなかったけれども、地元の方と相談しながら、どういう基準にしようかということをやりにかけていたところだったというのは、むしろいいことで、もうちょっと早めにやっていたいただければ本当はよかったですね。

**伊藤** 言いわけになりますが、2次系の漏えい検出器の対応マニュアルは大体できあがり、次に1次系を、というときに起きました。マニュアルの整備をもっと早くやっていれば、との思いはあります。

**首藤** 広報・伝達の関連のマニュアルは、自分たちだけで決めるのではなくて、相手の方と相談しながらでないと決められないはずのものだと思います。私は自分が文系だから言うのも変なんですけれども、技術系の方は、物と相対していると、物は自分が設計したとおりにつくればできるはずで、もちろん、そうもいか

ないところもありますけれども、基本的に自分の思うとおりにつくって、その通りに動くことを求めるんだと思うんです。けれども、人が相手の場合は、絶対にそんなことはないですね。ですから、始めから相手の方と相談しながら、マニュアルをつくったり、ルールをつくったりしないとうまいかなと思います。

---

## 双方向コミュニケーションの大切さ

---

**司会** 組織の再編や複合部隊だったというのもある面では難しい要因だったのでは。

**伊藤** そういうことはありません。「もんじゅ」の職員は、そう大きく変わってはいません。もともと、「もんじゅ」を設計した部隊が中心になっていますが、常陽の方が入ってこられ、今、「ふげん」の方も職員に入っています。もちろん電力会社の方もおられます。それぞれ一生懸命やっています。複合組織だから、ばらばら、ということはありません。

**司会** 安全文化面での現状評価いかがでしょうか。

**伊藤** かなり良いところに行っているのではないかと思います。第三者機関にいただいた技術系職員対象のアンケート調査結果があります。調査時期は改造工事が終わった2006年、それから、先ほど言った漏えい検出器の故障後の2008年、さらに2009年で、ほとんど全員が回答しています。結果は2008年が悪い。トラブル等を起こすと自信がなくなってしまうし、風通しも悪くなったりします。2009年の結果は、回復してきました。運転再開して、自信がつけば安全に対する意識もさらに上がってくるのでは、と思っています。

---

## 技術継承について

---

**司会** 年齢構成はどうなっているんですか。

**伊藤** 年齢構成はかなり高いと思います。ただ、機構の中では、「もんじゅ」最優先ということもあって、6～7名ですかね、必ず新人を入れていただいています。若い人はこれまで残念ながらメンテナンスだけをやっており、本当の運転、発電の経験はありません。これからいよいよ試験再開ということで、彼らも大いに期待しています。やっとならしい技術継承ができるとしています。やはり実際に運転し、装置の故障やト

ラブルを克服して技術を習得するのが一番です。今の若い人が高速炉の技術開発を中心的に担っていかなくてはなりませんが、これからの試運転を通じて技術はしっかり伝承されていくと思っています。

---

## 理解増進をいかに図るか

---

**司会** 順調に運転を進め、研究開発を行って行くには、安全担保はもとより、国民の理解促進が不可欠です。この点に関してはいかがでしょうか。

**伊藤** 福井新聞がなされました2003年4月と2007年4月のアンケート調査によりますと、前者では運転再開すべきが7.8%、不安はあるがやむを得ないが28.6%で合せて約35%でしたが、後者ではそれぞれ10.7%、48.3%で合せて約59%となっています。2008年トラブルでちょっと落ちたかもしれませんが再開容認の傾向はそう変わらないと思います。

当初は、理解促進活動とは、理解させることだという感じがちょっと強かったんだろうと思います。けれどもそのうち、広聴・広報、双方向のコミュニケーションの大切さが認識され、JCO事故以降はリスクコミュニケーションの観点も加わり、説明会というよりも、小集団の対話型説明会(サイクルミーティング：女性職員が主役)といったものが非常に有効だったなと思います。

**秋庭** 敦賀本部の女性職員たちの広報チーム「あっぱる」が一生懸命に一般の方たちを対象に説明などの活動なさっています。そのような活動はすばらしいと思います。女性の視点でわかりやすく説明なさっています。自分たちのやっていることを皆さんに理解してほしいという、その切ないほどの気持ちが受けとめる側も伝わってきます。私は、そのような活動こそが地元の方々の「もんじゅ」に対する理解を得る原点になっているような気がするんですけれども、いかがですか。

**伊藤** そうですね。技術系の女性職員もいますけれども、普通の事務をとっている女性職員が始めたんです。

**首藤** 全日空の機体メンテナンスセンターに、一般のお子さん向けの見学コースがあります。私はそこに行ったことがあるのですが、そのとき、お子さん相手に説明をする女性の方は、「みんな、床を見てごらん」と言うんですね。「塵一つ落ちていないし、ボ



ルトも何も落ちていないでしょう、こういうふうにきれいにしておくことが、みんながエンジンを大事に扱っているということなんだよ」ということを言っていました。これはすごい説明だと思いましたね。技術者でもなく、もしかすると正社員でないかもしれない方ですら、これが自慢なんだよと言えることがすごく大事だと思います。

**秋庭** すばらしいですね。

**首藤** 今の「あっぷる」というのは、まさにそれに似たような感じですね。

**秋庭** 本当にそうですね。昨年11月に「もんじゅ」の見学に行ったとき、説明資料をいただきましたが、これが難しかったんですね。技術的な用語でいろいろ説明されると、なかなか頭に入りにくいんです。一緒に見学した全国から集まった女性グループの人たちは、それぞれのグループ代表として来ていますから、地域に帰ったら、自分のグループに説明しなければならなかったんです。ところが、「とてもこれでは説明できない。だれでもわかるような資料をいただけないかしら」と言う方もいました。「もんじゅ」で働いている皆様にしたら、「これだけわかりやすく説明しているのに」と思うのでしょうか、話を聞いている方たちがどういうふうに関心を持っているのか、先ほど首藤さんの話もありましたが、外の人の目というのをもう少し意識していただけるとありがたいと思っています。

**伊藤** そうですね。改善していきたいと思います。

**司会** 原子力の技術の方は、省略するということが苦手で、たとえ話をすることが嫌いなんですね。これは、技術系の方は皆さんに共通しますが、たとえ話をしないと一般の人はわからない。

**首藤** 相手の方によっても、反応は随分違うかなというふうに思いますね。私は、事故の後に、当時通っていた大学院の研究室で「もんじゅ」見学があり、まさにあの漏れた現場まで入れていただいたんです。簡単に行ける場所とわかったので、2次系で漏れたというのはこういうことだったんだと、すごく実感できました。そこから出てきて、会議室のようなところでご説明を伺ったりしているときに、ナトリウムが水と反応すると危険だということは別の分野の方から随分聞いていたので、なぜナトリウムを選択したのかについて尋ねました。そのとき、「ほかになかったからです」と

いうお返事をいただいたんです。

**伊藤** だれだろうな、そんなつっけんどんな人(笑)。

**首藤** 「そうですか」と、その後の会話が続きなくなってしまいました。「そうなんだけどな」とずっともやもやしていたんですけれども、つい最近、自分が何を求めているのかわかった気がしました。先日、元原子力委員の木元教子先生にお話を伺ったときに、コミュニケーションというのは、例えば、相手がどんな意見を持っているのか、何を求めているのかを知って答えるだけじゃなくて、なぜそういう意見を持つのか、どうしてそういう質問をしてくるのかということに関心を持つことだとおっしゃられました。あのとき「私がどうしてナトリウムなんですか」と言ったときに、「こうだけど、何でそんな質問をしているの」と聞いてくれれば、私は、「実はこういうふうに思っていて、こういうことをたくさん聞いているんだけど」と話がつながったなと思うんですね。

今、リスクコミュニケーションで双方向だと言っても、意見を伺いましょう、質問を受けましょうまでになっている気がします。本当はもっと踏み込んで、相手の方はどうしてそういうことを言うてくるんだろうか、どうしてそういう質問をしてくるのか、その背景にあるのは何なんだろうなということを、いろいろ知っていかなければいけない、そういうことなのかなと思いました。

**司会** それが本当の対話型のコミュニケーション。

**首藤** そうです。相手のバックグラウンドとか、考えていることに関心を寄せるということ自体がすごく重要なんだと思いますね。

**秋庭** 私は、「もんじゅ」の皆さんにぜひお願いしたいと思うことがあります。もう一度、国民に「もんじゅ」の役割、意義、必要性等について丁寧に説明していただく必要があると思っています。よく言われることですけれども、「もんじゅ」に多額の国費が投じられています。今まで止まっても費用は年間100億円くらい、もっとかかっていますよね。

**伊藤** もう少しかかっています。

**秋庭** 今後、動くともっとかかるわけですね。

**伊藤** そうです。

**秋庭** でも、それだけの費用がかかっているもやっといく必要があるんだということを、もう一度きちんと丁寧に説明する必要があると思います。ナトリウム

漏えい事故から14年もたって、福井県以外の国民は記憶もだんだん薄くなってきているのではないのでしょうか。地球温暖化への関心の高まりや、また、国際的な資源獲得競争が厳しくなっている状況の中での、高速増殖炉の位置づけや重要性、そして「もんじゅ」の運転を通して得られる成果が原子力機構を中心に進めている FaCT プロジェクトなどの今後の高速増殖炉サイクル技術開発にもつながるどうしても必要なものであることをきちんと説明すればわかってもらえると思います。「動いてよかった」と言うだけでなく、もう一度このようなことをきちんと説明して、この機会に、国民が原子力についてしっかり考えてほしいと願っています。

**司会** 内閣府が昨秋発表した世論調査では6割以上が原子力に理解を示しています。原子力発電大国のフランスでも6割程度ですから、ものすごく大きな数字です。そういう方々に本当にわかっていただくことが大事でしょう。

**首藤** 全体の中で「もんじゅ」の位置づけはこうですけどじゃなくて、「もんじゅ」を動かすことで一体何ができるのか、何をやっているんだろうということも知らせて欲しいですね。いろいろな学会発表とかはたくさん出されると思うんですけども、学会だけではなくて、一般の社会に、「もんじゅ」を動かすことでこれがわかったとか、こういうふうによくできる方法が見つかったとか、そういったことが知らされて、「もんじゅ」を動かしていることで科学技術がきちんと発展していったって、安全で有効なエネルギーが生まれるための技術が徐々に蓄積できているんだということがみんなにわかるようになっていったほうがいいかなと思います。

**秋庭** この14年の間にきっと新しい技術がいっぱい開発されて、これからはそれが生かされていくと思います。よく学会でも原子力機構の方々が発表なさっていますし、そういう技術がこれからの世の中になくはないものだということを、もっと国民が認識できるといいなと思います。

**伊藤** 今の試験に取り組んでいるのは若い人です。彼らが実際にデータを取ったりしますので、彼らに発表してもらうように考えています。試験をやるほうも忙しいし、マニュアルもたくさんあるんで大変なんですけれども、なるべく早くまとめて成果をぜひ発表させ

ていただきたい。当然、「もんじゅ」がきちんと発電炉として皆さんに信頼してもらえるんだということ、そういう実績をつくらなければいけませんし、ナトリウムは確かに欠点もあるけれども、高速増殖炉には必要なんだ、安全に取り扱えるんだということを理解してもらいたい。

それから、フランスの高速増殖原型炉フェニックスが昨年末運転を停止したものですから、西側社会で高速増殖炉の技術継承を現場で行っていくのは「もんじゅ」しかありません。アメリカ、フランスのジュニアだけじゃなくて、新しい人を受け入れて、道場のように、「もんじゅ」でいろいろ開発をやって腕を磨いてもらおうと思っています。

最後は、やはり地元の方が、「もんじゅ」をやって、さすがにすごいと、こう言ってもらわないといけないんで、そういう意味では、大学や企業との連携などもぜひやっていきたいと思っています。

**秋庭** あともう1つ、つけ加えて宜しいでしょうか。昨年11月の「もんじゅ」見学の際に、「福井県女性エネの会」の方たちと交流しながら話し合いを持ちました。「福井県女性エネの会」は、原子力についてしっかり勉強するとともに、紙芝居を作って学校や老人会などで理解活動を一生懸命なさっています。そのエネの会の方たちが、やっぱり全国の広報をしてほしいとおっしゃっていました。何かあったときに風評被害を被るのは敦賀です。そういうときに、「敦賀は怖いところだ」とか言うのは、「もんじゅ」を知らない人たちだと思うんですね。だから、全国の人にもっと「もんじゅ」について知ってほしい、と強調なさっていました。

**首藤** 確かに、その意味では不十分かもしれないですね。地元では大きく新聞でも取り上げられて、全国レベルだとそんなに大きく載らないですし、難しいですけどね。

**司会** きょうはどうもありがとうございました。

(この座談会は2010年4月12日に都内で行いました  
＝編集部)